改革教会世界共同体(WCRC)の提案

「義認の教理についての共同宣言」に調印する改革派の提案

１．

　信仰による義認の教理は、新しくエキュメニカルに合意されたことによって、福音の真髄を現している。それゆえ、その教理が言わんとしている所についての合意は、最高に重要なことである。最近の数年に、ローマ・カトリック教会とルター派諸教会とメソディスト教会とは、一致へと収れんする好ましい段階にこぎつけてきた。長年にわたってなされた痛みを伴う対話のうちに、1999年には義認の教理についての共同宣言がカトリックとルター派によって調印され、2006年にはメソディストによって裁可された。かつて宗教改革を引き起こしたことが相互の一致に落ち着いたのである。16世紀に互いに破門し合ったことは、有益な警告としてなお受けとめられはするが、現在の状況には当てはまらないとして放棄された。

２．

　わたしたち改革教会世界共同体（以下WCRC）は、このようなエキュメニカルな一致に加わる用意がある。わたしたちは、これまでにもたらされた大いなる収穫に喜びと謝意を表明する。それと同時に、わたしたちは、更なる解明と対話が必要とされる領域を指摘したいと思う。わたしたちは、現段階での合意を受け入れ、豊かにし、発展させることを希望している。

３．

　わたしたちは、「義認の教理についての共同宣言」(以下JDDJ)§14-18に概要が示されている義認の共通理解が改革派の教理に一致することを認める。特に、神の救いの業が三位一体論とキリストを中心とする仕方で解明されているアプローチに感謝している。

４．

　わたしたちは傾聴することの重要性を認める。エキュメニカルな対話においては、語るよりも、まずもって聴き、傾聴したときにだけ、語る権利を得るのである。〔§14〕。

５．

　わたしたちは、義認が三一神の業であることを共に認め、同意する。福音の良い知らせは、神が、御子によって、聖霊において、世界をご自分と和解させられた、ということである。義認は、キリストの受肉、死と復活を前提とし、その中に根を持っている。義認とは、キリストご自身がわたしたちの義である、ということである（コリント一1:30）。聖霊のおかげで、わたしたちは、ことばとサクラメントによってキリストとの一致の中に入り、救済するキリストの義にあずかる。ただ恵みによって、救済するキリストの業を信じることによって、-----わたしたちの側に何ら功績があるからではなく-----わたしたちは神に受け入れられる。聖霊は、キリストにおいて、神がわたしたちに歩くようにと備えてくださった善い業の道を踏み行えるように、わたしたちの心を新しくしてくださる。〔§15〕

６．

　わたしたちは、また、神がすべての人をキリストに結ばれた救いへと召してくださることに同意する。わたしたちが、この救いを、恵みによって、信仰を通して受けるとき、わたしたちは、ただキリストによって義とされる。信仰は聖霊による神の賜物である。聖霊は、信仰共同体の内にあることばとサクラメントによって、信仰者たちを生の刷新へと導いてくださり、その生の刷新は、永遠の生命において神が完成させてくださる。〔§16〕

　　　　　　　　　　　　　　　　　　７．

　さらにわたしたちは、義認のメッセージが特別な仕方で新約聖書の核心へとわたしたちを導くことに同意する。キリストにおける神の救済行為に基づいて、義認はわたしたちに次のことを語っている。すなわち、罪人として、わたしたちは、完全に恩恵に依存している。キリストに結ばれたわたしたちの新しい生命は、ただ罪人を赦し、新たにしてくださる神の憐れみにのみよるものである。この憐れみは、わたしたちに賜物として分かち与えられる。それをわたしたちは、信仰によって受けるのであって、どのような仕方であれ、決して自らの功績として受けるのではありえない。〔§17〕

　　　　　　　　　　　　　　　　　　８．

　わたしたちはルター派と共に、義認は福音の不可欠な基準であることに同意する。しかし、カトリックと共に、他の基準もまた同じく重要であることを認める。〔§18〕

　　　　　　　　　　　　　　　　　　９．

　わたしたちは、ルター派とローマ・カトリックとが、16世紀以来長きにわたって互いを分断してきた義認の教理の極めて重要ないくつかの論争点について語り合って来たその事実を受け入れる（JDDJ§19,22,25,28,31,34,37）。さらにまた、それらの解明をも受け容れる。すなわち、JDDJ§20-21,23-24,26-27,29-30,32-33,35-36において,また§38-39において、ルター派とカトリックとが、これらの論争点についてそれぞれの立場に関して提出した解明を受け入れる。わたしたちは、これらの異なった観点を、ルター派と改革派、あるいはカトリックと改革派との間に分裂をもたらすような原因とは考えていない。

１０．

　改革派の伝統は、ルター、カルヴァン、その他の改革者たちによって表明されたように、義認についての聖書の教えに自らがことのほか強く負っていることを常に理解して来た。同時に、聖書の教えは義認の教理を構成する諸要素をも含んでいたし、それらは初代の東方と西方両教会のカトリック的伝統に属している。この伝統は、改革派の義認の教理に著しい輪郭を提供した。ルター派とカトリックとの間で合意された義認の教理の基本的真理〔§40〕を損なうことはないと考えられるが、なお言葉遣いや神学的構成、また強調点について積み残されている相違に関して、改革派の教えは以下のように言い表されうる。

１１．

　改革派の伝統に従うと、原罪の教理はキリスト教にとって本質的教理である。人間本性の堕落は、わたしたち自身によっては解決できない。堕罪による破壊的結果は、御子を通して、聖霊における、御父の主権的な救いの計画によって克服される。わたしたちは、自らの救いを、まったく神に依存しており、それゆえ義認は、ただ神の恩恵によって起きるのである。キリストが、救いをもたらすご自分の従順（extra nos）によって成し遂げられたことは、聖霊によって、とりわけ神のことば、そして洗礼と主の晩餐のサクラメントを通してわたしたちに伝達され、適用される（in nobis）。いかなる人も神の先行する恩恵の働きから離れては、神の召しに応えることができない。〔§19〕

１２．

　義とする神の行為に承服することが恩恵の賜物として理解されるならば、わたしたちはカトリックと一致する。この承服は、信仰に属する一側面である。〔§20〕わたしたちはまた、どんな人も自ら自分の義をもたらし得ない、ということでルター派との深い一致を表明する。

１３．

　罪は、違反であり、また力でもあるので、神の恩恵は、赦しと（罪の力からの）解放をもたらす。神の赦しは、わたしたちの違反を赦免し（義認）、神による解放は、罪への隷属からわたしたちを自由にする。その結果、わたしたちの信仰は、愛によって働き、発動する（聖化）。キリストとの結合は、改革派の教えによると、このような二つの救済的益の源泉である。

１４．

　改革派の理解によると、神の前に救いをもたらすキリストの義にわたしたちがあずかり（義認）、生涯にわたって回心する（聖化）のは、わたしたちが信仰によってキリストの内に包まれることによってである。それゆえ、わたしたちは、キリストの正しさがわたしたちの義しさ（§23）であるとするルター派と一致する。また、神の赦しの恩恵は常に新しい生活という賜物（in nobis）をもたらすことにおいてカトリックと一致する。〔§24〕

１５．

　改革派は、罪人は恩恵により、信仰によって義とされる、と教える（エフェソ2:8）。恩恵は義認の源泉であり、その根拠でもある。他方、信仰は恩恵を受ける受容器である。キリスト者は生涯ことごとく神の約束に信頼して生きる者である。信仰は、愛と希望なしには真実に存在できない。また行いのない信仰は死んだものである。それゆえ、神と隣人への愛は信仰に欠かせない。しかしながら、愛の業が義認の土台であるのではない。義認は、どんな仕方であれ、功績として与えられるものではありえない。〔§25〕

　　　　　　　　　　　　　　　　　　１６．

　改革派の理解によると、義認と聖化はともにキリストに結ばれることから来る。それゆえ、わたしたちは、ルター派が「義認と再生とは、信仰に現存するキリストによって結び合わされる」と主張するとき、彼らと一致する。また、罪人は信仰によってのみ義とされる（sola fide）、神はみことばの宣教によって信仰をもたらされる、ということにおいても、彼らと一致する。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　１７．

　改革派は、わたしたちが神の子どもとして受け入れられるのは、信仰によってキリストに結ばれることとして起きる、と教えている。わたしたちは、（神の）自由な恩恵によってキリストに結ばれ、神の前に義しいとされる。一方、わたしたちは、義しい者とされてはいるが、自らにおいてはなお不完全である。同時に、わたしたちは、カトリックが、義とする恩恵は生活の刷新をもたらすが、この刷新は、わたしたちが義とされるために何ら原因とはなりえないことを強調することにおいて、彼らと一致する。〔§27〕

１８．

　改革派の理解によると、わたしたちは生涯、ことばとサクラメントによって、神の恩恵に依存し続けている。恩恵は、決してわたしたちがただ所有するような何物かではない。恩恵は、わたしたちが主の名を呼ぶように、常にくり返し受けるだけでなく、永遠にわたって一たび決定的に受ける重要な贈り物である。わたしたちは「古いアダム」と闘うことにおいて日ごとに赦しを祈り求めなければならない。神の恩恵は朝ごとに新しいのである。〔§28〕

１９．

　信仰者は「義人にして同時にまた罪人である（simul iustus et peccator）」ことについて、わたしたちはルター派と一致する。わたしたちには、義と罪とは程度の問題である前に、無条件なものだという感覚があるから、わたしたちは、信じる者としてはキリストにおいて「まったく義しい」が、自らでは神の前になお全く（totus）罪人である、とする彼らと一致する。それにもかかわらず、隷属させる罪の力はすでに打ち破られているのだから、罪は、もはやわたしたちを支配しないのである。恩恵によって、わたしたちは絶えず自由とされて、正義と愛の新しい生活を送るのである。〔§29〕

２０．

　改革派の理解によると、大罪であれ小罪であれ、また原罪であれ実際に犯す罪であれ、すべての罪は神の前に有罪の判決を受ける。わたしたちは、(自由意志に基づく決断に先立つ生来の性向である)情欲と意図的な承諾とは区別されるべきであり、また、情欲と本性的欲求(natural desire)とは同じではないとするカトリックと一致する。さらにまた無秩序で有害となる欲求は、人間の罪深さの表れであり、神によって有罪とされる、と主張する。〔§30〕

２１．

　わたしたちは、キリストがその死と復活によって律法を満たされたこと、また「救いの道」としての律法を克服されたことを認めている。それゆえわたしたちは律法の業ではなく、信仰によって義とされる（ローマ3:28）。キリストの教えと模範は、わたしたちの行為の規範を打ち立てる。また、神の戒めは、信仰者として生活するわたしたちにとって有効であり続ける。〔§31〕

２２．

　改革派の理解によると、キリスト者にとって律法は行為の規範であり続ける。律法もまたわたしたちの罪を暴露し、罪をとがめるために仕えることを、わたしたちはルター派と共に主張する。律法は、キリストにおいてわたしたちを神の憐れみへと導くとき、正しく用いられる。〔§32〕

２３．

　わたしたちは、神はキリストによって憐れみ深く、神の子どもたちに永遠のいのちの恩恵を約束されたというカトリックの声明を喜んで受け容れる。わたしたちは、神が意図されたことは満たされ、わたしたちの内に始められた善い業は完成されると確信をもって主張する。〔§33〕

　　　　　　　　　　　　　　　　　　２４．

　神の賜物と招きとは取り消されない（ローマ11:29）ゆえに、神の賜物である信仰は救いの確約を含んでいる、とわたしたちは信じている。確約のない信仰は欠けあるもの、混乱したものであろう。確約は、第一にわたしたちの内の何かあるものには拠らず、――それが信仰、業、聖霊の照明であれ、――ただキリストと神の約束に基づいている。〔§34〕

２５．

　改革派は次のように信じている。すなわち、信仰の確約は選びの教理に結ばれている。神の選びは、わたしたちの救いが、ただキリストの恩恵に基づいていることを強調する。なぜなら、わたしたちは、世界が造られる前からキリストにおいて選ばれているからである（エフェソ1:4）。それゆえ改革派は、わたしたちが自らの救いについて不安にとらわれてしまうとき、わたしたちは、ただキリストに眼を注ぎ、キリストにのみ信頼すべきだとすることで、ルター派と一致する。〔§35〕

２６．

　改革派の理解によると、神はキリストにおいてわたしたちの救いを信実に約束しておられる。それゆえわたしたちは、信仰は神の約束という客観的な現実に基づいており、神の約束が信頼できないとは考えられえない、とするカトリックの主張を歓迎する。〔§36〕

２７．

　わたしたちは、善い業が信仰の実りであることを認める。さらにまた、善い業は、ただ神の恩恵に基づいてなされうることにも同意する。〔§37〕

２８．

　わたしたちは『カトリック教会のカテキズム』（#2011）に引用されたリジューのテレーズの次のような美しい声明に同意する。「地上での追放の生活が終わったならば、天のふるさとであなたにまみえることができると期待しております。けれども、わたしは天国のためのいさおしを積み上げようとは思いません。あなたへの愛のためだけに働きたいのです。・・・この世のいのちの終わりに、わたしは空手でみ前に臨むつもりです。主よ、わたしの行いを数えてくださるようにとはお願いいたしません。すべてのわたしたちの義は、御目には汚れたものです。ですから、わたしはあなたご自身の義をまとい、あなたの愛によってあなたご自身を永遠に頂きたいのです。・・・」義認と永遠のいのちとは共に功績によらない、上よりの賜物である。〔§38〕

２９．

　わたしたちが特にルター派と一致するのは、わたしたちがキリストの義にあずかるのは、部分的な仕方ではなく徹底したものである、ということである。永遠のいのちは、キリストの義に基づいて、恩恵により、信仰によって与えられるように、信仰者に対する神の約束の成就として授けられる報いであって、功績にはよらない。〔§39〕

３０．

　共同宣言で取り扱われていない特定の一領域は、改革派にとって特別な関心に属している。それは、さらに解明され、対話の主題とされるに値する。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　３１．

　改革派は、共同宣言が義認と正義との結びつきについて沈黙していることを懸念している。改革派の伝統からの、最近とみに重要な信仰告白はベルハー信仰告白である。この信仰告白は、「正義と真の平和を人々の間にもたらそうと望んでおられる御者として、神はご自身を啓示しておられる」ゆえに、義認と正義とには、ことさら明確な結びつきがあることを明らかにしている。さらにアクラ信仰告白がある。この信仰の声明は、世界規模の経済状況がはらむ不正義を率直に指摘して、「世界規模の公正な経済活動が、神に対するわたしたちの信仰とキリスト者としての訓練とを一つに統合する上で欠くべからざること」を明らかにしている。また、すべての人は豊かないのちを受けるという強い希望を率直に表している。・・・それゆえに、わたしたちは次のことを拒否する。すなわち、その宣教活動の中で、貧しい人々や被造物への配慮を欠き、すべての人が命を豊かに受けるためにおいでになった「良い羊飼い」（ヨハネ10:11）に従うよりも、「盗み、殺し、破壊する」（ヨハネ10:10）ために来る者らに慰めを与えるような、いかなる教会の実践や教えをも拒否する。また、このような改革派の理解によると、教理は倫理と分離されないゆえに、義認と正義とは分離されえないのである。それゆえ、わたしたちは以下のことを強く主張する。すなわち、わたしたちは、不正義の諸形態を正当化しようとするどんな主義主張や、福音の名によってそのような主義主張に抵抗しようとしないどんな教理をも拒否する。1986年制定の信仰告白であるベルハー信仰告白§4と2004年のアクラ信仰告白§15,§18を参照。

３２．

　義認とは、不正義の除去、溢れる憐れみ、罪人の回復、抑圧された者のために正義を求める命法などを意味する。義認は、わたしたちの無秩序がすべて正され、世界が神と和解させられることである。すなわち、主の到来に至るまでの中間時代にあって、教会はキリストを愛し、キリストを証しすることにおいてあらゆる社会的無秩序に立ち向かい、世界における正義と自由と平和を求めて立ち上がるよう呼びかけられている、ということである。

３３．

　とりわけ義認とは、社会的無秩序による犠牲者たちと連帯し、社会的・経済的不正義の体制に反対することである。義認とは、排除されている者を包み、捨てられている者を受け容れ、低くされている者、追いやられた者を抱きしめることである。わたしたちは、社会の底辺で必要なものに事欠いている人々の苦しみを軽減しようとすることなしに、キリストに従いえない。キリストは、わたしたちの罪をわたしたち「人間の悲惨」とみなすように心を動かされたのであった。

３４．

　地上に正義を打ち立てるために、神は常に貧しい人、排除されている人、抑圧されている人の側にお立ちになり、低くされている者のために、高慢なものに対して立ち向かい、権利をはく奪された人々のために、利権を常に手にしている者に対して立ち向かわれる。

３５．

　わたしたちは改革派のキリスト教徒として、このような合意に基づき、これまでにルター派と改革派の教会が幾つかの国でお互いをイエス・キリストの一なる教会に属するものとして認め合い、説教壇と食卓のフルコンムニオンを宣言したことを喜んでいる。わたしたちは近い将来、このような義認の教理というわたしたちの共通理解に基づいた宣言に従い、他の場所でもルーテル教会とローマ・カトリック教会、さらにメソディスト教会との親密な関係に入ることができることを大いに望んでいる。

◎公式の共同承認

　この声明において、改革教会世界共同体(WCRC)とそのメンバー教会は、1999年10月31日にアウグスブルクで世界ルーテル教会連盟とローマ・カトリック教会を代表して調印され、また、2006年7月23日にはメソディスト教会によって裁可された「義認の教理についての共同宣言」（JDDJ）に表明された教えに根本的な教理上の一致を承認する。

　「義認の教理についての共同宣言」に調印するパートナーは、改革教会世界共同体とそのメンバー教会の上記の声明を一緒になって歓迎する。この声明は「義認の教理についての共同宣言」に表明された義認の教理の合意された基本的真理について改革派が一致していることを宣言し、明らかにするものである。

　四つの当事者は、義認の教理の基本的真理を共に承認し合うことにより、神学研究や教義、説教においても、義認についての共通理解の深化を互いに追求することを誓う。

現在の成果と深い関わりは、カトリック、ルター派、メソディスト、改革派によって、すべてのキリスト者に向けられたキリストのご意志である共同の聖餐(full communion)と世界に向かってなす共通の証し（common witness）を追求する、その一部であると受けとめられる。

（翻訳：後藤憲正）